

「三人寄れば文殊の知恵」

地域のシンボルを 守り続けて400年



会長 内田 国男さん(62) 富永昌子さん(77) 星原 春代さん(80) 志水 京子さん(67)

舞鳴文殊堂奉賛会
moushigimonjudouhousankai
400年以上の歴史を持つ舞鳴文殊堂を管理する地域団体。舞鳴地区26軒のうち4軒が毎年交代で1日と15日の前日の清掃や花の飾り付け、大みそかの大掃除や元日の祈願例大祭を行う。
祈願例大祭
日時 1月1日 午前10時



1月24日に役員を引き継ぎました

三が日には2000人以上の人出でにぎわう。
400年以上の歴史を
守り続ける地域の力

このお堂を守っているのは舞鳴文殊堂奉賛会の皆さん。昔は人口が多く若者もたくさんいて管理も楽だったと皆話すが、現在では高齢者の数までも減り、毎月1日と15日の前日の清掃は一苦労。特に紅葉の時期はイチョウの落ち葉が急勾配の石段や道路に積もり滑って危ないため、清掃は欠かせない。「台風などの大嵐の時以外は寒くても暑くても休みません。」と志水さんは慣れた手つきで掃除している。

頼りになる地域のシンボル

この文殊堂は、仏の知恵を象徴する菩薩「文殊菩薩」、日向の眼の神「生目八幡」、火伏せの神「秋葉明神」、生あるもの全てを救う仏「阿弥陀如来」が一緒に奉納される全国的にも珍しいお堂だが、この地域にとっては生まれたときから身近にある当たり前のもの。地域のシンボルであ

り、頼りにするものでもある。「お世話をするのも当たり前。そう思って今まで続けてきました。」と星原さんと富永さんは、ほほ笑む。
これからも知恵と地域の力を結集して

昔は個人の世帯が何十年も続けて世話をすることもあったが、平成5年の400年記念祭の前に新しいお堂ができたのを機に高齢化する世話人の負担を考え、交代制を取り入れた。だが世話人は60〜90代。後継者不足が悩ましい。

内田会長は「確かに大変なことですが、それでもみんなで文殊の知恵と宇城市という広い地域の力を結集して、知恵を絞り、これからも先祖代々引き継いできた地域のシンボルを大切に守っていききたい。そして観光地としてにぎわいを持たせたい。」と将来の展望を描いた。



①たくさんの寄付者が名を連ねる 施設の灯籠などの設備は、そのほとんどが寄付によるもの ②道路まで念入りに清掃 ③願いを込め絵馬を奉納 ④祈願例大祭に向け飾り付け ⑤集落を見守る文殊堂と大イチョウ



西の太宰府といわれ
多くの受験生が訪れる文殊堂
武者返しの石垣群を抜けると目にも鮮やかな朱赤の灯籠が連なり、樹齢400年を超えるイチョウの大きさが地域を見守っている。ここは舞鳴文殊堂——。小川町舞鳴地区の高台にあるお堂だ。学問の神様といわれる文殊菩薩を本尊していることから「西の太宰府」と呼ばれ、受験シーズンともなると、県内外から多くの参拝者が訪れる。また、